新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2010.vol.4　19～23

風景構成法における彩色についての考察

運上　司子・橘　　玲子（新潟青陵大学大学院）
長谷川早苗（新潟信愛病院）
中村　協子（三浦クリニック）

キーワード：風景構成法　彩色　感情体験

The color drawing in The Landscape Montage Technique

Shisako UNJO　Reiko TACHIBANA（Graduate School of Niigata Seiryo University）
Sanae HASEGAWA（Niigata Sin-ai Hospital）
Kyoko NAKAMURA（Miura clinic）

Key words：landscape montage technique, color drawing, emotional experience

Ⅰ．はじめに

風景構成法（Landscape Montage Technique）は、中井久夫により統合失調症への箱庭療法の適否を検討する予備テストとして発案された（1969）。それ以来今日まで、心理臨床の有効な技法として発展してきた背景にはさまざまな研究がある。創案者である中井自身も多くの考察、研究を発表しており、その中に、ロールシャッハ法や箱庭療法との比較によって風景構成法の独自性を明らかにしようとしている研究（1996）がある。そこでは「パラディグマ指向的な過程」すなわち「曖昧な事象を判読解釈する過程」と「シンタグマ指向的な過程」すなわち「全体を文脈的に睨み合わせつつまとめていく過程」とを挙げていて、前者はロールシャッハ過程に、後者は箱庭療法や風景構成法において考えられるとしている。更に、風景構成法について「全体をまとめていく過程」であると述べていると同時にその彩色段階については、構成段階と比べて、よりロールシャッハ的過程であると考察している。彩色の作業は一応構成された「風景」を修正し、情動づけ、混沌を最終的に追放する機会であり、色彩を選ぶという対象選択的な行為は線描だけの風景の先鋭化を和らげ、風景画を補完していると言う。中里（1984）、松井（2009）などは、彩色作業に重心を置いた研究を取り上げ、佐藤（1996）は、彩色作業がもたらす情緒的なつながりに言及している。風景構成法は構成と投影の両面から語りかけてくる描画法の特徴を持っていると考えられる。

確かに、心理臨床の場面においてペン描きの後に続いて繰り広げられる彩色過程に接していると、内的な精神活動への自由な退行が促されているのであろうという感触を覚えることがある。それはロールシャッハ法において固有の反応が一つひとつ編み出されていく過程に似ている。つまり、先ず教示に従って、川、山・・・と風景の構成に挑戦していく作業は、丁度、建物の設計図のように描画者の人格像を構築していく骨組みになっているが、その上に色を塗っていくにつれて、素朴な感覚が刺激され、感情体験は開かれ、潜在していた描画者固有の心象世界が映し出されて風景の完成に向かうものと想定される。筆者らの研究（2008）において、統合失調症を対象にした風景構成法を取りあげた際にも、同様の経過を観察することができた。構図が自然なまとまりを持って肯定的に変化していくか、あるいは、別次元の視点が混在してアイテムのバランスを崩していくか、または、常同的なアイテムの並列を繰り返すのか等などには、風景を描く構成力が大きく作用していると考えられた。しかし、更に複雑な病理性の内容も含めて心の中にある個人的なドラマに触れていくには、彩色の強弱やタッチ、色の重ね具合、塗り残し、色彩選択の固執性等などが意味深

い指標となってくることに気づかされた。

本研究では、風景構成法の彩色過程が、アイテムの指示を受けてペン描きで進むという前半の作業に比べて、その構成の枠から自由になり、感情体験がどのようになされているのかを調べてみることにした。

Ⅱ．方法

１．対象：

被験者の総数は233名であり、男性60名（26％）、女性173名（74％）である。その内訳は、大学生105名、短大生69名、通信制大学生49名、某団体のボランティア10名である。年齢については、青年期、中年期、高齢期に分け、青年期は175名（75％）、中年期は31名（13％）、高齢期は27名（12％）である。（表１参照）

２．手続きと内容：

⑴　通例の風景構成法を集団で施行する。Ａ４ないしＢ４の用紙１枚と黒のソフトペン、24色のクレパスを配り、教示は次のように与える「今から風景を描いてもらいます。私が描いてもらうものを10個順番に言います。一つひとつ描いていくと風景になります。絵の上手下手は関係ありません」と。枠づけは隣席同志で用紙に枠を描き込んでもらう。10個の項目は、川、山、道、家、木、人、花、動物、石の順番である。ペンによる素描が終わったら「最後に描き足したいものがあったらどうぞ描いてください」と告げて、全員足並みが揃うのを少し待つ。次に「色を塗ってみましょう」と続ける。私語は禁止し、質問は挙手に対応する。風景の描画後に、日付、氏名、性別、年齢、季節などの質問に続けて、最後に「ペン描きと色塗りには違いがありましたか？　色塗りで感じたことはありますか？」と尋ね、その感想を用紙の裏に自由記載してもらう。

⑵　彩色について記載された感想内容を①肯定的な感想、②否定的な感想、③中立的な感想、④感想なし・不明の４群に分類した。

Ⅲ．結果

１．被験者の特徴

表１で示した通り、対象者総数における男女差は、男性60名（26％）であるのに対して、女性73名（74％）であり、明らかに女性が多い。次に年齢層は19歳から74歳までの幅になっている。年齢群として、青年期（19歳～29歳）、中年期（30歳～49歳）、高齢期（50歳～74歳）の３つの年代に分けた。この結果、男性は青年期50名（83％）、中年期３名（５％）、高齢期７名（12％）であり、女性は青年期125名（72％）、中年期28名（17％）、高齢期20名（12％）である。男女共に、青年期が圧倒的に多いが、男性は特に青年期に集中している傾向がある。

２．描画彩色への感想

⑴　彩色感想の４群の特徴

記載してもらった彩色への感想内容を①肯定的な感想、②否定的な感想、③中立的な感想、④感想なし・不明の４群に分けた結果が表２である。これによると、①肯定的な感想は159名（68％）、②否定的な感想は23名（11％）、③中立的な感想は37名（16％）、感想なし・不明は14名（６％）であり、肯定的な感想が最も多かった。

ここで４群の特徴を述べると、肯定的な感想としては、例えば、「温かくなった」「楽しかった」「奥深さが出た」「絵に動きが出た」「色塗りの方が自由」

表１　　被験者の性別と年齢分布

性別・年齢	青年期（19歳～29歳）	中年期（30歳～49歳）	高齢期（50歳～74歳）	合　　計
男　　性	50（83%）	3（ 5%）	7（12%）	60（26%）
女　　性	125（72%）	28（17%）	20（12%）	173（74%）
合　　計	175（75%）	31（13%）	27（12%）	233名

表２　　彩色感想の４群（肯定的・否定的・中立的・不明）

感　　想	肯定的感想	否定的感想	中立的感想	感想なし・不明	合　　計
合計（%）	159（68%）	23（11%）	37（16%）	14（６%）	233

「世界が広がった」「にぎやかになってきてイメージが広がってくる」等々の表現で記載されている。ここに感情が明るく開放的に高まっていく様相を見ることができる。否定的な感想としては、例えば、「ペンの方が自由だった」とペン描きの方がしっくりした人がいたり、また、「リアル感がなくなった」「迷いっぱなしだった」「難しい」「暗い感じになってしまった」と色塗りに馴染めず戸惑いながら、暗い感情を抱く人がいたり、あるいはまた、「クレヨンが手について嫌だ」「めんどうくさかった」と、色塗りへの抵抗感を強めて感情を閉じていく人がいたり、否定感情といってもさまざまである。中立的な感想には例えば、「意外と暖色系が少なくなった」「サインペンで書いている時は深く考えながら書いていたけど、色をぬっている時は感覚的、直感的に書いていた気がする」「ペン書きは存在を表し、色塗りはその存在を強める」「ペンは素材、色塗りは味付け」「ペンは２次元的（平面的）、色は３次元的（空間的）な感覚がある」「ペン描きは基本。基準。色塗りは基本から飛び出しても良い、あいまいなもの」「ペン書き・・・線、色塗り・・・面」等々、描画に距離をとって観察や分析をしている論理的で冷静な姿勢がうかがえる。

⑵　彩色感想の性差

彩色感想の４群（肯定的、否定的、中立的、不明）について、性差をまとめたのが表３である。この結果、男女共、肯定的な感想が第一位であることには変わりないが、男性は肯定的な感想が25名（42％）、否定的な感想が15名（25％）、中立的な感想が14名（23％）、感想なし・不明が６名（10％）であり、女性は肯定的な感想が134名（77％）、否定的な感想が８名（５％）、中立的な感想が23名（13％）、感想なし・不明が８名（５％）であった。つまり、女性は肯定的な感想のみが突出して高く、それ以外の否定的な感想や感想なし・不明では極端に低かった。これに比べると、男性は肯定的な感想に続いて否定的な感想や中立的な感想にも出現率が見られた。（図１参照）

⑶　彩色感想の年齢差

彩色感想の４群について、年齢差を整理した結果が表４である。肯定的な感想が青年期では119名（68％）、中年期では22名（71％）、高齢期では18名（67％）であり、いずれの年代においても肯定的な感想が70％を占めた。しかし、否定的な感想においては年齢差が見られ、青年期は22名（13％）、中年期は１名（３％）であり、高齢期では該当者がいなかった。この結果、年齢が上がるにつれて否定的な感想を言わなくなる傾向が見られた。更に、表１から、男性は60名中の50名（83％）が青年期に集中しており、中年期と高齢期にいる割合は女性に比べて非常に低かった。従って、否定的な感想を言わないことは、女性の中年期と高齢期の特徴と考えられる。逆に、青年期の男性は否定的な感想も中立的な感想も伝える傾向が女性よりも強いと言える。（図２参照）

表３　　彩色感想の４群に見られる性差

性別・感想	肯定的感想	否定的感想	中立的感想	感想なし・不明	合　　計
男　　性	25（42%）	15（25%）	14（23%）	6（10%）	60
女　　性	134（77%）	8（ 5%）	23（13%）	8（ 5%）	173
合　　計	159	23	37	14	233

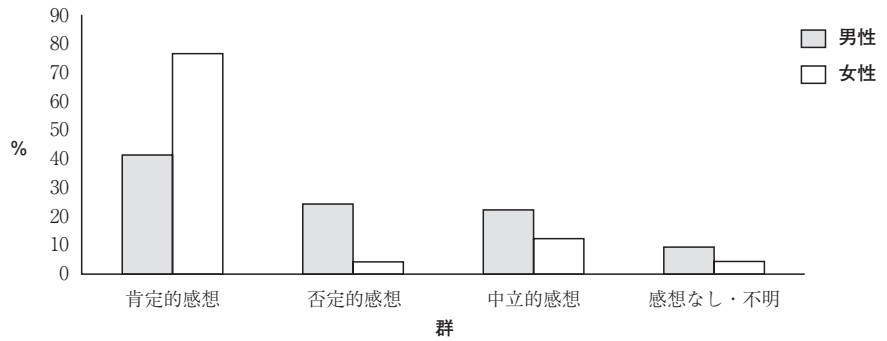

図1　彩色感想の４群に見られる性差

表４　彩色感想の４群に見られる年齢差

年齢・感想	肯定的感想	否定的感想	中立的感想	感想なし・不明	合　　計
青 年 期	119（68%）	22（13%）	27（15%）	7（ 4%）	175
中 年 期	22（71%）	1（ 3%）	5（16%）	3（10%）	31
高 齢 期	18（67%）	0	5（19%）	4（15%）	27
合　計	159	23	37	14	233

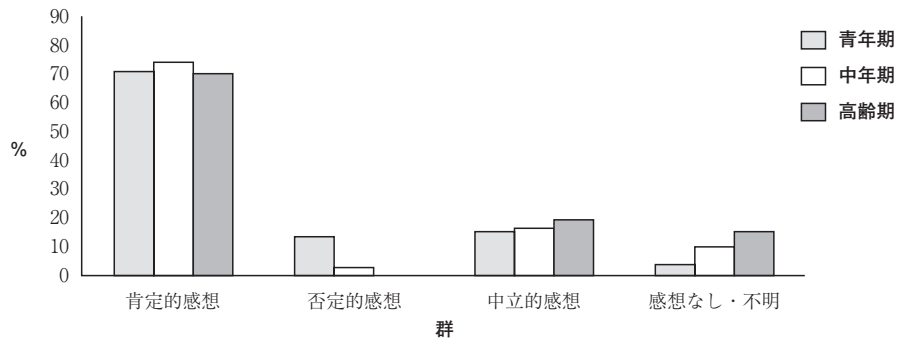

図２　彩色感想の４群に見られる年齢差

Ⅳ．考察

１．彩色の行為がもたらす肯定的な感情体験

風景構成法の彩色という行為は、男性でも女性でも、年代が若くても年齢を重ねても、肯定的な感情体験をうながしていると言える。色塗りをしながら、ペン描きの形式的な窮屈さを緩めていくことができ、絵が下手だというような描画の能力に対する低い自己評価を高めることができる。つまり、自己を許容していく体験を経て、素朴な感情反応へと自然に誘導されていくと言える。緊張してスタートした風景構成法であっても、彩色の段階に入ると、描画者は自己の気持ちに合わせてその作品に馴染んでいくことができる。これらのことは、風景構成法が侵襲的ではなく、同時に、満足感をもって終了することを可能にしている一因であろうと思われる。

２．肯定以外の感情体験

彩色の行為では、多くの若い女性群から感情が明るく高まっていく様相を見ることができるが、肯定的な感情反応だけではなく、異なる感情体験も性別や年代の違いで十分にありうると言える。色塗りの行為によって生の感情が引き出されてしまうことは一種の脅かしでもありうるし、その不快感情に翻弄されそうな戸惑いから、否定的な感情反応で対応したり、冷静な分析力を駆使したりして自己の安定を保持しようとすることは十分に了解できることである。青年期の男性が、単に明るい感情反応だけで現実状況を受け入れるのではなく、抵抗したり、異議を唱えたりする傾向は健康な姿でもある。また、年輪を重ねた女性が、単刀直入に発言することは控えて、現実の状況に淡々とつきあっていく姿勢は生活の知恵でもあろう。風景構成法における彩色の過程では、明るく肯定的な感情体験のみを期待するのではなく、それ以外の感情体験にも注意を向けていく意味がある。集団で施行した場合、描画後に彩色の感想を記載してもらうことは大切だと言える。

３．彩色の行為がもたらす危険性

本研究は、適応上、問題のない人が対象となっているので、自然で肯定的な感情反応が引き出され、それが優位を占める結果になっていると考えられる。しかし、対象者に病理性がある場には、隠れていた病理性が彩色の行為で露になる危険性もある。筆者らが前々回に取り組んだ統合失調症者を対象とした風景構成法の研究からもこの危険性は考えられる。そこでは、風景構成法の描画過程でプラスの変化が見られる群、物語性が感じられる群、病理性がうかがえる群、変化の少ない群とに分けて検討したのであるが、病理性がうかがえる群の彩色過程では、アイテムのバランスの悪さや構成の拙さに加えて、粗雑な色塗り、ベッタリと色を塗るタッチ、不自然で奇妙な色の選択、彩色への没頭等などが見られた。彩色の行為は、描画者を生き生きとさせ活力

を与えもするが、同時に、潜在している病理性を刺激して病的なレベルに退行をさせてしまうことも想定される。これは、ロールシャッハ法で起きる病理的な退行に近似していると思われる。描画者に病理性が疑われる場合の描画法では、とりわけ、彩色の過程では、内界を侵襲しない距離への配慮が求められるし、個別に関わっていくことの重要性（高橋2007）を自覚すべきである。

Ⅴ．まとめ

１．風景構成法の彩色過程は、描画者に肯定的な感情体験をもたらすことが多い。
２．女性群は特に中年期、高齢期において否定的な感想が見られなかった。男性群は青年期において否定的、中立的な感想が見られた。
３．本研究の対象者は女性群が圧倒的に多い。このことが描画彩色への肯定的な感想の出現率に影響を与えているであろう。今後は、男性群を増やして、性差を明確にしていきたい。

註

本研究は青陵大学大学院共同研究費の助成を受けて行ったものである。

引用文献・参考文献

中井　久夫（1996）　風景構成法．山中康裕編　風景構成法その後の発展　岩崎学術出版社　3-26

皆藤　章（1994）　風景構成法－その基礎と実践　誠信書房

高石　恭子（1996）　風景構成法による構成型の検討－自我発達との関連から　山中康裕編風景構成法その後の発展　岩崎学術出版社　239-264

佐藤　文子（1996）　「集団風景構成法」と「合同風景個性法」の試み．山中康弘編　風景構成法その後の発展　岩崎学術出版社　144-166

角野　善宏（2002）　病院臨床における風景構成法の実践　皆藤章・川嵜克哲編　風景構成法の事例と展開　誠信書房　94-118

高橋　依子（2007）　描画テストのＰＤＩによるパーソナリティの理解－ＰＤＩからＰＤＤへ－　日本描画テスト・描画療法学会編　北大路書房　臨床描画研究22　85-98

運上司子　橘玲子　谷川則子　長谷川早苗（2008）　風景構成法に表現される「石の変化」－統合失調症を対象として－　新潟青陵大学大学院臨床心理学研究第２号　15-23

宮本ゆり子（2008）　ＬＭＴ療法（風景構成法）の可能性　精神療法第34巻第５号　46-51

松井　華子（2009）　風景構成法における彩色過程　皆藤章編　現代のエスプリ　風景構成法の臨床　至文堂　120-128